

## 病院薬剤師の職能変容—面接法による調査から

○赤木 佳寿子<sup>1</sup> (<sup>1</sup>昭和薬大)

【目的】健康サポート薬局、かかりつけ薬剤師、かかりつけ薬局等、昨今薬剤師に対する社会における役割への期待が大きく話題となっている。同時に、今までの医薬分業のあり方が厳しく批判され見直しを迫られている。これらの背景を踏まえ、薬剤師の社会的役割を早急に明らかにすることが求められていると言える。報告者は医薬分業の歴史的な観点から薬剤師職能の探求を行っており、その中で1990年代の医薬分業の急進展に病院薬剤師の職能変化が深く関わっていることが明らかになってきた。この時期の病院薬剤師の変化とは病院内の薬局での業務から病棟への業務への変化で、今の薬剤師全体に求められる、チーム医療、患者中心の医療への変化との係わりも大きく、この時代に何が起っていたのか、薬剤師に何が求められ、薬剤師は何を目指していたかを明らかにすることが、現在の薬剤師のあり方の形成を知る重要な手掛かりとなると考えた。

【方法】1980年～1990年代の病院薬剤師の職務の変化がどの様な手順を踏んで起こったかを明らかにするために、1990年代に病院薬剤師をしていた薬剤師8名にインタビューを行った。面接方式は半構造化面接法で、こちらが用意した質問に対して自由に応えていただく方式を用いた。面接者1名、インフォーマント1名の個人面接法で、アプローチは質的面接アプローチを用いた。面接はひとりあたり、1.5～3.5時間であった。

【結果】多様なタイプの病院（国立大学病院、私立大学病院、企業病院、中規模病院、共済病院等）に、異なった立場（薬局長、主任、常勤、パートタイム）で1980～1990年代当時病院に勤務していた薬剤師から聞き取りができた。それぞれの異なる立場、環境、状況の中であるにもかかわらず、その時代の病院薬剤師は手探りで新しい職能を求めていっていた。その、職能は様々であったが、一様に「臨床」「人への作用」といったものを重要視し、そのことに重点がシフトしていく変化があった傾向が認められた。

【考察】1980～1990年代当時はまさしく「モノから人へ」という変化の時代であったと言えるのではないだろうか。薬剤師が描く理想と病院の要求が合致した部分から変化が起りモノから人へという動きとなってこの変化が形成されたと考えられる。